
俺の主人と彼女の執事

まこっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の主人と彼女の執事

【Nコード】

N0929L

【作者名】

まこっちゃん

【あらすじ】

アルバイトの成り行きである屋敷の執事になることになった。

その主人はなんと学校で一番かわいいが無愛想で無口の少女だった。

そこから始まるほのぼの系恋愛。

第一話 始まり

高校に入学して早くも一カ月がたとうとしていてようやくクラスに馴染んだと思っていた5月ごろの話だ。

学校が家から近いという理由だけで選んでしまった俺だが、もう少し離れば都会に出れるがあえて地元に来てしまったまあ田舎という田舎でもないし別に不満がなかった。

「よ、夜空」

後ろから肩をたたかれた振り返ると木島がいた。

「ゴールデンウィークどこか行ったか？」

木島というのは中学が一緒にまあ仲が良かった方の奴だ。

「特にどこにも」

「お前せつかくのゴールデンウィークにどこのも行かないとは、どういうことだ！俺みたいに彼女の一人でも作って過ごさないか」

「うるせえ！余計なお世話だ」

彼女作っての一月ももったことがないだろ。

教室に入るとまだ時間があった、隣で木島が彼女の自慢話さえやめれば最高なのに。

「お前の彼女作れよ結構この学校他の学校より女子のレベル高いのに、校内ランキングでいうと3位が小林さん、2位が阿藤さん、で

1位があそこに座っている霧崎さんだ」

木島が指をさした方に目を向けるとそこにはハーフなのだろうか蒼髪（あは）のショートヘア（あは）をしていて小柄な子がいた。確かにかわいい。そこらへんのアイドルよりずっとかわいいと思うだが、

「霧島さんは、ないな」

「やっぱりか、顔はいいがまだ霧島さんがだれかとしゃべっているところ見たことないし昼休みとか放課後もずっと本ばかり読んでいるし無愛想なんだよな」

そうこの霧島さんは良く言えばクール悪く言えば無愛想といった誰とも関わりあいを持たない子だ。もったいない。

学校が終わりみんな足早に部活に行ったり帰り仕度をしていた。

「夜空！帰ろうぜ！」

「無理だ今日はバイトだ」

「そうか今日バイトだったのか、大変だな一家を支えるものは」

こいつが言ったのは大げさではない、俺の家は父親が他界してそのあと母親が働いている。その母親の仕事の都合でめったに帰ってこないし、ひどい時には仕送りを忘れて金がない時のある。家にはまだ小学6年の妹がいるのにすごい親だ。だから、俺がもしものために働いている。

「まあな、じゃあそついうわけだがらじゃあな」

「ああ、頑張れよ!」

バイト先はとある喫茶店だが、やっていることはなんでも屋だ。前はゴキブリ退治の依頼が来ていた本当に喫茶店なのだろうか？

「こんにちわ」

「あ、夜空！いいところに来た依頼が来たのだが、お前にちょうどいい仕事なんだ行ってくれるか？」

中から現れたのは30ぐらいのおっさんでこのオーナーだ。

「別にいいですけど仕事内容なんですか？」

「行きゃあ分るよ。お前って家事出来るよな？」

家事はほとんど出来る今では料理のレパートリーも1000は超えている。

「掃除の依頼ですか？じゃあ、いいですよ」

「良かったじゃあ、これ地図な！後はヨロシク」

こんなとこに家なんてあつたて？

そこは家から歩いて30分かかる山の中だった。ここに住んでもう16年たつがこんなところに家があるとは知らない。だが、ふと顔を上げるとそこには洋風の屋敷があつた。

「うあ、屋敷じゃん。はじめて知ったぞこんなところにあるなんて
大きさは校舎一つ分はあるだろうか周りは塀に囲まれていて立派な
屋敷だ。」

こんなに大きいと使用人も必要か。納得した。

立っているのも何だのでチャイムを押した。

「すみません。今日働くことになってるものですが？」

ガチャ

そこから出てきたのは蒼色の髪のショートヘアの子だった。

第二話 俺の主人

「えっともしかして依頼主って霧崎さんの事なのか？」

「……………(コクッ)」

ビー玉のような目が俺を見ていた。

「まず俺のこと知っているか？一応同じクラスなんだが？」

「知っている」

「じゃ、じゃあ、依頼内容を確認するな？」

やばい、いきなりの事なので若干声がああ震えている。

「今日一日この屋敷の掃除でいいな？」

「……………違う」

「えー！」

「私が依頼したのは私が許可を下すまでの執事を依頼した」

「えええええー！！」

淡々とした口調で話していた。

「いや、聞いてないよそんなこと！」

「……でも、あなたは今日から私の執事になった。ちゃんと依頼したから」

くそ！帰ったらまずオーナーを殴らないと気が済まない。

「はあく、わかったよ。今日からよろしくな霧s……こういう場合お嬢様とかのほうがいいのか？」

「……………月夜でいい」

数秒間考えていった。

というか名前月夜だったのか、はじめて知った。

「じゃあ、掃除がしたいので中に入っていいか？」

「どうぞ」

「おじゃまします」

中に入ると驚愕した。

シャンデリアがあり中世の屋敷を意識したような洋風の作りだ。だが、想像していた壺や絵画がなかった。

「すげえな！確かにこの大きさは使用人とか雇った方がいいな」

家の中を一回り見たすると大体の事がわかった。

基本多くの部屋は使われていなくて、図書館レベルの本があり、なんとキッチンを使った形跡がほとんどない。

「こりゃあ一日で終わる量じゃないな」

まずはじめに掃除、洗濯、庭の掃除などした。

洗濯の際は、ちゃんと下着は自分で洗ってもらった、一回洗おうか？と聞いたら冷たい目で見られた。

「ああ〜、やっと少し終わった。」

「御苦労さま助かった」

そついい月夜は牛乳を出してくれてた。

「ありがとう、・・・うわ！もうこんな時間だ。そろそろ帰るか」

「え！あ、うん」

？

どうしたんだ？こんな反応して月夜らしくない。

く~~~~

どこからかお腹が鳴る音がした。

「もしかして、お腹すいているのか？」

すると、月夜は少しうつむいていた。

「わかった、なんか作ってやるよ。リクエストあるか？」

「・・・唐揚げ」

少し頬を染めて言った、学校では絶対に見れないを思い目の網膜にその光景を焼き付けていると

「私、料理出来ない」

まあ、キッチンが使われてない時点で何となく気付いていた。

「わかった、じゃあ座って待ってる。すぐ作るから」

これから、このような光景が日常になるのかと思うと悪い気がしなかった。

第二話 俺の主人（後書き）

楽しく読んでいただけると光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929/>

俺の主人と彼女の執事

2010年10月9日08時23分発行